

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

動物のドメスティケーション：
ブタ飼育における個体管理：
台湾ヤミが行なうブタの舎飼いと放し飼いの比較

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野林, 厚志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001151

ブタ飼育における個体管理 —台湾ヤミが行なうブタの舎飼いと放し飼いの比較—

野林 厚志
国立民族学博物館

本稿の目的はイノシシからブタへの家畜化に関わる文化的な背景について、人間側が行う生殖管理、個体レベルにおける維持管理（給餌）、行動管理、所有管理、消費管理の諸相について、台湾原住民族の一つのグループであるヤミの人たちが行なっているブタの飼育を中心にしながら考察することにある。イノシシからブタへの家畜化の動機づけが食肉の安定的な供給であり、肥育を目的とした家畜化という印象が強い一方で、肥育をおさえた品種を飼育するということが、ヤミの社会における家畜としてのブタの継続的な保持にうまく機能していたことには留意しておく必要がある。生態学的資源の確保が目的とされる家畜の飼育の場合と異なり、個体を長期間維持していくことが目的とされた飼育であれば、必ずしも大量の個体が扱われるとはかぎらない。これは、もともと群居サイズがそれほど大きくないイノシシの家畜化を考えるうえで考慮してもよい問題と言える。

1 はじめに	4.3.1 行動管理
2 イノシシとブタとの関係	4.3.2 給餌管理
3 ブタの粗放的飼育	4.3.3 生殖管理
4 ブタの放し飼いの事例	4.4.4 所有管理と消費管理
4.1 調査対象の概略	5 考察
4.2 ヤミの家畜と家禽	6 まとめ
4.3 管理の諸相	

*キーワード：ブタ、家畜化、台湾原住民族、肥育

1 はじめに

本稿の目的はイノシシからブタへの家畜化に関わる文化的な背景について、人間側が行う動物の個体管理という観点から考察することにある。具体的には、ブタの飼育方法として古くから採用されてきた粗放的飼育に焦点をあて、放し飼いという状態における個体管理の諸相について考えてみたい。

家畜化とは動物の生殖を人間側の管理下におき、個体ならびに種の管理をより強化していく世代を越えた連続的な過程であると一般的に理解されている。ゾイナーは家畜化の過程を一般化し次のような5つの段階を設定した（ゾイナー 1983: 57-58）。(a) 自由な繁殖を伴った拘束性のない接触。(b) 囲いの中での繁殖と、人間環境への拘束。(c)

一定の動物の形質を得るために、人間が組織した選択的飼育と折々の野生種との交配。(d) 一定の好ましい特性をもった品種を計画的に発達させる人間の経済的配慮。(e) 野生種は虐待され、あるいは絶滅された。ゾイナーの設定した(e)の段階は必ずしもすべての動物にあてはまるものではない。本稿でとりあげるイノシシとブタとの関係は、野生種と家畜種が併存したものであるからだ。(a)から(d)までの過程についてはおおむね同意を得ることになるだろう。すなわち、人間側で初めは無意識的に、後にはそれによる利益に気づいて、意識的ならびに計画的に動物を利用し、その結果として、人間の利用目的に応じた種が形成され、それらが維持されて家畜種が生じることになる。ここで注意しておきたいのは、家畜化とは動物側にとっても人間側にとっても世代を越えた連続的な過程だということである。すなわち、人間側から動物になされる所作が一代限りであったり、一時的にしか行なわれない類のものでは、家畜種の形成は必ずしも達成されえないということをあらかじめ認識しておく必要がある。動物利用も含めた人間側の生活形態、動物観、動物を扱う技術や技巧といったものが、特定の野生種に対する継続的な作用を生じさせた場合にのみ家畜化の可能性が生じるということである。

家畜化を人間と動物との総合的な関係性のありかたであるととらえたときに、自然科学的な観点から引き出されてくるモデルは、人類集団と生物との共進化という図式でしばしば説明されることになる(例えば、Zeder 2006: 108)。これは、生物学や農学における家畜化もしくはドメスティケーションの定義が、生物学的な変化をとまなうことを前提にしているからである。これに対して、人間と動物との継続的な関係性が長期にわたる場合に生じる状況を、生物のありかた、時間軸、人間側の所作といったすべての要素を含めたかたちで、松井はセミ・ドメスティケーションと定義している(松井 1989: 33)。ドメスティケーションの過程を論じるうえで、この作業仮説的な領域を設定することは妥当と考えてよいであろう。なぜならば、家畜化に必要な条件ならびに家畜化が達成された条件は、それぞれの野生種がもともと持っていた生態学的な特徴、その動物と接触した人間の社会的、文化的属性、そうした状況が生じた歴史的背景等、あらゆる条件に影響されるため、動物種によっても違うであろうし、接触した人類集団、時代によっても異なっていた可能性は十分に考えられるからである。このことは、先にも述べた、野生種が維持されるか否かという問題にも関わってくる。家畜種の発生にとまなう野生種の絶滅は必然的に生じるものではない。その代表的な例が、本稿でとりあげるイノシシとブタとの関係であったり、遊牧が行なわれているトナカイであったりする。トナカイ遊牧の場合、「飼育」されているトナカイが家畜であるかどうかという判断は、個体の所有という問題に関わっている。例えば、ラップのトナカイ牧畜においては、家畜の放し飼いの形態とその消費の過程がほとんど狩猟と変わらない状態をもっているにも関わらず、家畜を所有するという牧畜独自の所有形態が顕示されていることから、家畜としてのトナカイの存在が説明されている(松井 1989: 49)。同様なことは、パプア・

ニューギニアのボサビの人たちにおける野生化ブタの所有のありかたについても見られる。彼らは、飼育ブタと野ブタとを厳密に区別しており、野ブタには所有権はないため狩猟の対象として消費してもよいと説明している（小谷 2005: 98）。彼らの飼育ブタと野ブタとの間には生物学的な差異があると言えないことから、人間側の動物の認識という点における家畜の定義とは生物学的な定義と必ずしも一致するとはいえないことが理解できる。むしろ、個体の管理や消費という問題が人間側にとっての家畜の認識に少なからず関係していると考えたほうがよいのである。したがって、人間がどのような作用を動物に対してもたすか、もっと具体的に述べるならば、管理という所作が飼育している動物にどのように及ぶのかを整理することが、個々の動物について必要になっていくと言えるだろう。

2 イノシシとブタとの関係

本論に入る前に、野生種と家畜種であるイノシシとブタについての関係を簡潔に述べておく。

イノシシの学名は *Sus scrofa*、ブタの学名は *Sus scrofa domesticus* であり、両者は原種と家畜という関係にあることが容易に理解できる。実はこのことはブタが他の家畜動物とは異なる位置づけにあることを意味している。リンネの分類学が確立した18世紀半ばには、すでにウシの祖先種であったオーロックスやウマの祖先種のタルパンは絶滅しており、ヒツジやヤギの祖先種は明確ではなかった。このためブタ以外の家畜動物は「家畜化された (*domesticus*)」という学名を付与されていない。似たような例はイヌにもあてはまるが、イヌの学名は *Canis lupus familiaris* であり、*domesticus* という亜種名は与えられてこなかった。正田は、イノシシがヨーロッパに普通に野生しており、そのうえ家畜化されたブタの中には改良の程度の低いイノシシとあまり変わらないものも残っていて、祖先種と馴養種との関係が誰の目にも明らかであったことが、ブタとイノシシとの学名上の関係を築かせた原因であろうと述べている（正田 1987）。

イノシシからブタへの家畜化はユーラシアの東部と西部とで別々に進行したと現在のところ考えられている。ユーラシア西部におけるイノシシへの家畜化は「肥沃な三日月弧」すなわち、現在のイラン西部からシリア北部にかけた地域で約8500年前に起こったと考えられている。Hongo らは、イノシシが家畜化された可能性のある候補地の一つであるトルコのチャユヌ遺跡で、先土器新石器時代の動物遺存体の四肢骨のサイズが、時代をへて緩やかに変化していったということを動物考古学的な分析にもとづいて検証している（Hongo and Meadow 1998）。Hongo らのデータから読み取れるのは、イノシシの家畜化は長期間にわたり緩やかに進行したものであり、ピンポイント的に家畜化が生じた時期を示すことは難しいということである。一方、東部では中国大陸の随所

で新石器時代以降の遺跡にブタと同定される骨が見つまっていることから、ブタが種として固定されていった過程が存在したであろうということが推定されている。例えば、現在の広西チワン族自治州の桂林郊外に位置する甌皮岩洞穴遺跡からは、約9000年前ぐらいと推定されるブタの遺存体が見つまっている。これらのブタの遺存体の年代は他の家畜動物の考古学資料と比べた場合、かなり古いものである。すなわち、人間は比較的早い段階からイノシシに家畜化もしくはそれに準じた関与を行なってきたと考えてよい。

ところで、Hongoらの示した分析結果は、最初に述べた、家畜化という行為や現象が動的なものであることを具体的に示したものであると言える。このことは、実は動物側と人間側の時間の割き方の関係も議論の視野に入れることにつながる。すなわち、遺伝的な形質が固定され安定していき、それが形態に反映されるまでに要する時間と、人間側が考え方、技術、生活形態を保持していく時間との関係である。数千年という幅で動物側の変化を考古学的にとらえることは可能であるが、数千年連続して人間が特定の種に関与し続けることが可能であるのかということについては、一考の余地があるだろう。特定の人類集団が、数千年という期間を継続して存在できたのだろうか、そして、仮に存在し続けたとして、イノシシという動物種に対して連続的に関与し続けることが可能だったのであるかという問題である。イノシシと人間との関係がそれまでの野生動物と人間との関係から、家畜化という方向に進行したということは、それが一方的に進んでいくための方向性が存在していたのであろうし、人間が動物にあてる所作にも同様な不可逆的な志向があった可能性は否定できない。換言すれば、イノシシからブタへの家畜化は人間の特別な技術や所作以上に、生物学的、生態学的属性がその方向性に適応していたという考え方である。そして、結果的にはイノシシとブタが生物学的には同一種であるという状態を保ち続けていることになったと言える。

イノシシからブタへの多地域的な変化は、*Sus scrofa*の様々な亜種や地域集団が独立的に存在しているという生物地理学的な条件に加えて、家畜化を行なった人類集団の動機づけやその手法が共通していたことに起因するであろう。ブタは他の家畜動物に比べて、長距離の移動がそれほど容易ではないということもそれらを裏づける一つの条件である。家畜化されたブタを移動させるよりは、それぞれの土地において、その環境に適応したイノシシを手なずけるほうが合理的であるという考えかたである。

また、ブタとイノシシの食性が他の家畜動物もしくはその原種に比して人間に近いということも、家畜化を容易にした一つの条件であったと言えるだろう。例えば、イノシシの食事のメニューは実に多様である。各種のドングリや木の実、ベリーや野生りんご、植物の根、根栽類、野菜の地上部と地下部の両方、穀類、生きたままの昆虫や小動物にいたるまで食用可能である。さらには人間などの排泄物も彼らの食料となる。これは、人間が生きている環境のすぐそばでも十分生きていける能力を有していることを意味している。

ほどほどの群居性（数頭程度）と体のサイズ，さらに生殖効率がよいという点も，家畜化を容易にした条件と考えられる。自然環境下におけるイノシシの個体群構成は，単独の雄イノシシと数頭の子供をつれた雌イノシシからなっている。ウマやシカのように個体群密度が高いものに比べて，イノシシは少数の個体で安定した社会を作ることができる。このことは特に定住した人々にとっては飼育しやすい性質であると言えるだろう。生殖効率の点では，シカやカモシカ，ヒツジといった草食動物と比較した場合，シカやヒツジの初産齢がおおむね2歳であるのに対し，イノシシは満1歳で出産が可能となる。また，1回の産仔数がシカやカモシカが1頭，ヒツジが2頭弱であるのに対し，イノシシは4～5頭を産み，出産率についても，他の動物が数年に1回の割合で出産するのに対して，イノシシは毎年出産する（常田 2001）。生産性という点からもイノシシからブタへの家畜化は人間にとってきわめて合理的ななりゆきと理解することができる。

こうした点をふまえながら，人間がブタに対してどのような所作を行ってきたかを考えることは非常に重要となる。人間がブタをどのように管理しているかについて，現在の事例をもとにしながらかえることは，ブタが家畜化された現象に関連した人間側の所作を明らかにする糸口を与えてくれることが期待できるのである。

3 ブタの粗放的飼育

ブタの飼育方法として一般的に行なわれているのは舎飼いである。これは，人間側のブタの利用の目的が主として食肉の獲得であるため，効率的に肥育させるために，栄養効率の高い餌を与えながら大量に飼育し，それを効率的に屠畜，加工するために適した方法がとられていると考えてよい。一方で，ブタが放し飼いにされている例は世界の各地域でも見られる。

中国におけるブタの飼育は舎飼いという印象が強い。とりわけ，人間の排泄物を利用した飼育方法は中国の墳墓などから出土される陶製の生活明器に便所とブタの飼育場所が隣接したものがしばしば見られることから，豚便所の利用が中国において優勢であったという議論もよく行なわれている（西谷 2001）。一方で，現在でも中国の地方の農村，とりわけ，少数民族の居住地域ではブタが家屋の周囲や集落内で放し飼いにされている例が少なくない。筆者が予備的に調査した雲南省の少数民族の居住地域では，一層を畜舎，二層を人間の居住空間にした高床式の家屋がしばしば用いられているが，一層部分がブタの出入りが自由になっていて，家屋の周囲でブタが放し飼いにされている光景はしばしば見受けられた。ブタは日中は家屋周囲で餌をあさりながら，決まった時刻に人間側からの給仕をうけ，夜間は一層内部で睡眠するという飼育形態がとられていたのである。歴史的にみると，放し飼いは中国におけるブタの飼育形態としてそれほどめずらしいものではない。中国北魏の賈思勰によって著された農業の指南書である『齊民要術』

には、ブタの飼育方法について次のように述べられている。

春夏は草が茂っているから随時放飼すべく、糟糠の類は日日の分だけ与えるようにする。八、九、十月は放飼して舎飼せず、その分の糟糠は全部貯えておいて、窮冬春初に備える（賈 1969: 294）。

ブタは草食性の動物ではないので、草をそのまま食べるということではなく、昆虫や小動物を採食したり、秋季に産する木の実などがブタにとって最適な食糧になるため、該当する時期にはブタを屋外に放ち、自力で採食させるほうが効率のよいブタの飼育方法であるということが、社会的に認知されていたと言える。また、人間の残す食糧残滓もブタの餌になることは、農村部のみならず、都市近傍でもブタが放し飼いで成育されることに少なからず関係している。バングラデシュの地方都市近郊でもブタが群れをなしながら、人間の廃棄物をあさりながら移動する光景が見られるという。

一方、ヨーロッパでは、堅果類の森林を利用したブタの放牧飼育が行なわれていたことがよく知られている。中世ヨーロッパの暦である『ベリー侯の豪華なる時祷書』には、鞭をもち、牧豚犬を連れた牧童が森林の中でドングリを採食しているブタを管理している様子が描かれている。放牧というと牧場でゆっくり草を食むウマやウシを思いおこすかもしれないが、穀物生産に適さず、人口の少ないヨーロッパの森林地帯では、ブタを放逐して餌の供給を人間が行なわない飼育方法が採用されてきた。こうした飼育は古代ローマ時代にまで遡ることをクラットン＝ブロックは指摘する。

豚飼いたる者、つの笛の音色に合わせてつねに動くように子ブタを馴らせなければならない。手始めは囲いに追い入れる。この後、つの笛の音が響き渡ると、一面にオオムギのひろがる場所へと移動できるように、豚小舎が開けられる。この着想は、樹木の多い地方で群れが散り散りになったとき、子ブタたちが迷うことのないようにとの配慮によるものである（『農業論』巻二の第四節、一七一〇）（クラットン＝ブロック 1989: 120）。

現在ではイベリコ豚というブランドでハムの生産が、スペイン南部からポルトガル西部にかけて行なわれており、これらのブタ飼育はコルク櫟やオリーブを混生させた林の中で行なわれている。ただし、現在のイベリア半島の放し飼いは、囲いのある牧場で行なわれており、ブタが自由に移動できる状況が作られているわけではない。

東南アジアやオセアニアでは根栽類をベースにした開放性のある囲いの中での飼育が目立つ。これは根栽類や穀類をブタの餌にしなが、ブタにある程度の自由を与え、ブタが自力で採餌できる環境を作り出しなが飼育するという方法である。大林は丹念な文献渉獵の結果、東南アジアからオセアニアにかけてのブタ飼育に関して、「ブタ＋イモ」型、「ブタ＋イモ＋穀物」型、「ブタ＋ウシ＋イモ＋穀物」型という3類型への分類を試

みた（大林 1999）。生態学的に重要な点として考えられるのは、イモ類の栽培地域において、貯蔵に適さないイモを動物資源におきかえる手段として、ブタは文字通り、‘livestock’の役割を果たしてきたということである。一方で、ニューギニアに代表されるように、ブタは家畜としてだけでなく、野生化したブタ（以下野ブタ）が狩猟の対象獣となっていることが知られている（秋道 1993; 小谷 2005など）。また、アンダマン諸島民は野ブタの狩猟を行なう一方で、野生の子ブタをみつけた場合には、それを生かしたまま持ち帰り飼育することもある（Man 1975）。

ブタの野生化は世界の各地で見られる現象である。大航海時代以降のヨーロッパ各国は自国の粗放的な飼育方法で育てたブタを、航海の中継地点になるような島嶼部に放逐したため、野生化ブタを生み出す結果となったことも知られている（高橋 1996）。高橋はアメリカの地理学者 McKnight の言を参考にしながら、野生化家畜とは、生殖の管理をはじめとして、食物や飲水などの供給、牧棚の設置や修理、駆り集め、焼印、見回りなどの管理を長期間にわたって受けず、所有権やその主張もない状態のものと説明している。野生化したブタは代を重ねるごとにイノシシと外見上の見分けがつかなくなるが、生殖管理を人間が行っていないということは、生物学的なドメスティケーションの定義からははずれた状態にあることになる。一方で、ある一定の範囲に存在する集団内での交配を繰り返している限り、ブタの遺伝子を保持し続けることになり、生物学的にはブタと言わざるを得ない。さらに、人間側の認識という点においては、ニューギニアの例を考えると、個体が人間の管理下におかれているかそうでないかによって、生物学的な野生種と家畜種とは異なる家畜認識が存在しているとも言える。すなわち、民俗レベルでのドメスティケーションは生物学的なドメスティケーションとは異なるレベルで存在するということであり、その区別が行なわれる重要な点は個体そのものが人間の管理下におかれているか否かということにある。

以上の点を考慮した場合、舎飼いと放し飼いという飼育形態が、飼育者側にとってどのような意味をもっているのかを考えることは、野性種と家畜種を民俗レベルで区別する条件をひもとくうえで必要となるであろう。人間の居住地の近傍において、餌として自然物や人間が出す食糧残滓や排泄物を利用しながら、放し飼いのままブタが育てられることは十分可能であっただろうし、こうした放し飼いにされたブタが、人間側から家畜としてどのような管理を受けていく可能性があるのかということをも具体的な例をもって考えてみることにしたい。具体的には種を固定するための生殖管理、個体レベルにおける維持管理（給餌）、行動管理、所有管理、消費管理の諸相について、台湾原住民族の一つのグループであるヤミの人たちが行なっているブタの飼育を中心にしながら事例を紹介していくことにする。

4 ブタの放し飼いの事例

4.1 調査対象の概略

ヤミの人々は台湾の南端から東の海上へ約100km離れた太平洋上の蘭嶼島に居住している。島は、面積約46平方キロメートル、周囲が約40kmで、大部分は30度以上の傾斜地で構成されている。現在、ヤミの人口は約4,000人である。このうち、比較的若い人を中心に7割程度のヤミの人たちが移住や出稼ぎのために島外に居住している。島に住む人たちは比較的高年齢層の人が多く、政府からの生活の補助をうけながらも、伝統的な根栽農耕と漁撈活動に生活の基盤をおいている。タオの人たちは台湾原住民に含まれる民族集団ではあるが、母語であるヤミ語は、台湾本島の原住民の言葉よりもフィリピンの先住民の言語に近く、遺伝学的にもフィリピン側の人々に近縁であると考えられている。彼らの社会における基本的な単位は、夫婦とその未婚の子供たちで構成されるいわゆる核家族である。核家族は経済生活の基本的な単位であり、収穫物や漁撈活動で得られた魚はそれぞれの家族の成員によって消費される。また家畜や家禽の所有単位も基本的に核家族である。一方で、サトイモ水田の開墾や灌漑用水路の管理、家屋の新築、漁撈活動における集団漁などでは、血縁親族を中心とした相互協力の関係が機能している(野林 1996)。

太平洋上に孤立した島という彼らの自然環境は、生業活動である農耕と漁撈とに巧みな適応戦略を生み出させる要因となってきた。彼らの主食となるのは、サトイモ、サツマイモ、ヤムイモといった根栽類である。また、主食としては用いられないが、アワ、サトウキビ、バナナ、リュウガン、ヤシなどが栽培されており、これらはもっぱら自家消費され、商品作物として市場に出回ることほとんどない。漁撈活動には回遊魚を対象に3～6月にかけて行なわれる季節漁、それ以外の時期に行なわれる沖合い漁、沿岸や海岸付近で行なわれる網漁、刺突漁、磯で行なわれる竿釣り漁、貝類の採集活動などに大別される。貝の採集活動以外の漁撈活動はもっぱら成人男性によって行なわれる。

4.2 ヤミの家畜と家禽

ヤミの人々は家畜、家禽として、ブタ、ヤギ、ニワトリを有している。これらのうち、ブタとニワトリは基本的に核家族単位で飼育されており、複数の家族が共有した状態で飼養するということはほとんどない。ヤギは父系親族の間で共有されていることが多い。これらの家畜や家禽は全ての家庭や親族で飼養されているわけではなく、多くの場合、家屋の新築祝いや彫刻船の進水式を行なうことを予定している者が、他者から雌や雄の個体を購入して子豚を繁殖させたり、そのまま肥育させる個体を購入し、それらを数年間かけて育てるといったことが多い。とりわけ、ブタとヤギは新築祝いや進水式に際して主催者が屠畜し、それらの肉がサトイモとともに参加者に振舞われることによって、式

の主催者の社会的地位を上昇させる重要な家畜となっている。彼らの家畜や家禽の一般的な飼育方法については、ヤギは集落から離れた傾斜地などで群棲しており、ニワトリは集落内での放し飼いが基本となっている。ブタは集落周囲に設けられた各家庭の所有する豚舎や囲いの中で飼育されているが、自由に集落内外を歩き回る個体が頻繁に見られた。

ヤミの人々がもともと飼育してきたブタは毛色が黒色であり、頭部のサイズは相対的に小さく、吻部のしゃくれがそれほど強くない。1歳齢で30~40kg程度であり、東南アジア大陸部にしばしば見られるいわゆる小耳系の品種である。これらのブタは畜産の分野においてはミニブタとよばれており、一つの系統として認められている（田中2001: 155）。最近の研究によって、これらのブタには遺伝学的に2つの系統があり、アジアやヨーロッパの品種の影響を受けていない比較的古いタイプと、アジアやヨーロッパ品種との交渉の経歴が見られる、後になって分化していったタイプとが存在すると考えられている（Wu *et al.* 2007）。一方で、彼らは台湾本島から在地のブタとは異なる品種のブタを買い入れることがしばしばある。それは先述したように、家屋の落成式や彫刻船の進水式に際して催す饗宴において、参加者に供する豚肉が不足することをふせぐために、台湾本島からブタを買い入れてそれらを用いるためである。

4.3 管理の諸相

4.3.1 行動管理

ヤミの人たちがブタを飼育するのは家屋の落成式や彫刻船の進水式、また、その他の祝いごとを予定している場合であった。彼らが同時に飼育しているブタの頭数は限られており、一つの家で最大でも5頭前後であり、餌の調達や畜舎の確保という理由によって、雌雄のつがいとその子ども1~2匹が一度に飼養可能な頭数だと考えられていた。貨幣経済が浸透する以前の彼らの社会で、彼らの経済生活の状況を調査した岡田らの報告によると、1930年ごろの状況では、ブタは各家庭において1~2匹飼養されていた（奥田1941: 42）。ほぼ同じ時期に調査された統計データによると、当時のヤミの人たちの人口が約1,700人で、戸数が392戸であるのに対して、ブタの頭数は304頭であったことから（台湾総督府警務局理蕃課1936）、各戸におけるブタの飼育形態は大きくは変化していないと言ってよいだろう。

先述したように、ブタの所有者は畜舎もしくは囲いを設置してブタを飼育できる環境を整えていた。一方で、ブタは畜舎の外に出されて放し飼いにされていることも多く、大半のブタは日中は集落内外を餌をあさりながら徘徊していた。夜間は、給餌が行なわれた場合には、ブタは所有者の畜舎にもどされるため、そのまま畜舎や囲いの中で睡眠をとる場合もあれば、再び畜舎の外にだされたり、給餌が行なわれなかったりした場合には、そのまま集落周囲の藪や茂みなどで睡眠をとっていた。

ブタを畜舎や囲いの中に留めておくか、それとも舎外に出して放し飼いにするのかは基本的には所有者の判断に委ねられていた。彼らがブタを放し飼いにするか否かについては、自身がヤミの人間であり、土地のさまざまな慣習や文化的な事象を記述している夏本奇伯愛雅がその著作の中で次のように言及している。

食糧の欠乏、人手不足の場合は、外に放しておくで勝手に餌を食べてくれる。もう一つは、ほかの人間が放し飼いをしているのを見たら自分も放し飼いをする（夏本奇伯愛雅 1994: 104）。

最初の理由にあげられた給餌の見通しがあるか否かということは、ブタを放し飼いにするかどうかを決める重要な原因となっていた。ブタの餌に供するサツマイモの出来が悪い場合や、それらの収穫作業を怠っている場合には放し飼いによって、所有者側の給餌の負担を軽減する行動が見られた。逆に、舎飼いにするのは給餌を確実にできる場合であり、出産間近な雌の個体を保護したり、授乳中の雌とその子どもの個体の生育を確実にこなう場合である。

このように日常的に飼育されている在来種のブタとは異なり、祭礼の前に台湾本島や他の集落から買い入れたブタは必ず舎飼いされていた。集落のはずれに仮設の豚舎を設けたり、家屋の一部を囲った中で、これらのブタは数日間飼育された後に屠畜される。屠畜前の数日間は必ず給餌されており、これは屠前の数日間でもしっかり食べさせて、少しでも肥育させたほうがよいという理由からとられる行動であった。

4.3.2 給餌管理

給餌は、朝と夕方の2回もしくは夕方の1回、畜舎もしくは飼育囲いの中で行なわれていた。餌の内容は、人間の食べ残し（サツマイモ、サトイモ、米、魚、肉等）、サツマイモ、サツマイモの葉や蔓等で、これらに熱湯を加えたものを餌にしていた。市販の人口飼料や米糠の類が用いられることは稀であった。サツマイモを餌に加える場合は、必ずふかして調理したものを用いており、生のまま与えるということはしていなかった。ブタに与えるサツマイモはいわゆる屑イモにあたるものである。ヤミの人たちのサツマイモ栽培は、サツマイモ、アワ、サツマイモ、サトイモの順番で輪作にて行なわれる。同一の畑において2回目に栽培されるサツマイモは質の悪いものが少なからずできるため、できのよいサツマイモは人間の食料となり、できの悪いサツマイモはブタの餌に選択的に用いられていた。

餌は舎内部にある餌箱にいれて与えられていた。給餌の際には所有者がかならず立ち会い、時折、力の強いブタを餌箱から引き離したりして、各々のブタがなるべく均等に採餌できるように調整を行っていた。ブタを放し飼いにしている場合、所有者宅の人

間、多くの場合は女性が餌のはいった桶をもちながら集落の端に行き、大きな声で、「ウォーイ」という声をかけて、ブタを寄せ集めてから、豚舎やブタ囲いに誘導して中に引き入れてから給餌を行っていた。この際には他人が所有するブタも一緒についてくるので、それらの個体は追いはらわれていた。

給餌の際に必ず行なわれるのはブタの体に水をふりかけることであった。これは、放し飼いをしている最中にブタが特に集落の外に出ている間に、アニトとよばれる靈魂がブタにとりついてしまうため、それをおいはらうために行なうものであると説明されていた。

日中に放し飼いにされているブタは、人間の食べ残し、人間や他の動物の排泄物などをあさりながら集落内や周囲を徘徊していた。また、集落近傍の農地にはいりこんで、栽培されているサツマイモやサトイモを採食するブタも少なくないため、これらを防ぐための猪垣様の障害壁が集落近傍の耕作地に造成されていた。筆者の調査していた集落では人間による徒歩15分程度までの畑にはこうした障害壁が見られるものの、徒歩30分程度の場所の畑になると障害壁は見られず、それらの畑にはブタが入り込んでいる様子も見かけることはなく、ブタの行動範囲によって、こうした畑の形態にも差異が生じていたことが理解できる。

4.3.3 生殖管理

筆者が聞き取りを行なった範囲では、交配は舎外に出ている雌雄のブタが人間の管理外で行なう場合もあれば、人間側で交配させることもあり、また、所有者が同一の雌雄での交配もあれば、所有者が別々の雌雄での交配の両方を行なわれるということであった。繁殖雌を飼養するのは、将来的に家屋や彫刻船の建造を予定している場合が多い。先述したように、家屋や彫刻船の落成式には親戚や集落の住人を招いて饗宴を催し、その際にはサトイモ、ヤギの肉とともにブタ肉も参加者に分配する必要がある、それに足る頭数のブタをそろえなければいけないからである。そのため、繁殖雌を飼養して仔豚を生ませてそれを肥育させる必要が生じるのであった。それ以外の場合は、ブタ飼養は必ずしも積極的に行なわれるものではなかった。

出産は年に1～2回可能であり、1～2月に生まれる場合が多く、8～9月に出産する場合もあるとされていた。2～3月にかけて行なわれるトビウオの初漁の儀礼には生後数週間の子ブタを用いることもあるため、それに合わせた妊娠、出産をさせるための交配が行なわれる場合もあった。一度に生まれる正確な仔数については観察や聞き取りでは確認していないが、各家庭で所有しているブタの数は多い場合で2、3匹程度であったことから、産仔数は多くても5匹前後と考えられた。出産日が近いと判断した雌の個体は畜舎内に戻し、出産は人間の管理下で行なわせていた。子ブタは生まれてから自分で採餌できるぐらいまでは舎飼いで母ブタと一緒に飼育し、それ以降は他のブ

タと同じように畜舎や囲いの外に出されていた。種雄にしない場合の雄の個体は、肥育させる場合には生後1週間程度で去勢をほどこすが、1ヶ月以内で消費する場合には去勢は行なわず、また、雌の避妊施術は基本的には行なわれていなかった。

第二次大戦以前にヤミの農業について調査を行なった奥田らによると、ブタの交配は、雌ブタの持ち主が雄ブタの持ち主に依頼して交配を行い、出生頭数が2～3匹のときは謝礼として麻もしくは少量の粟を譲渡し、出生頭数が4～5匹におよぶ場合はその中の1頭を譲渡すると報告している（奥田 1941: 370）。

4.4.4 所有管理と消費管理

ブタの所有単位は核家族が原則となっており、複数の家族で所有され飼育されるということはほとんどなかった。放し飼いの状態においても所有者は自分のブタと他人のブタとの区別を容易に行なっており、給餌の際にも自分の所有するブタのみを畜舎や囲いによびいれていた。それぞれの個体の所有者が誰かということは、個体の耳朶の一部に目印となる切込みをいれることで明示されていた。所有者にとっては自分のブタが他人に盗まれてしまうことを防ぐためであったが、他者にとっては畑を荒らしたブタの所有者をつきとめるための目印にもなっていた。ブタが共有されるのは、2人乗り以上の彫刻船が建造されたときの落成式のように複数の主催者が存在し、それらの主催者同士が共同でブタを購入した場合などである。

彼らが日常的にブタを飼育する基本的な目的はそれらを肥育させて売却したり自家消費をしたりすることではなかった。自らが主催する家屋の落成式や船の進水式に際して、ブタやヤギを屠り、それらの肉を参加者に分配するために飼育することが多い。一方で、ブタの生育個体が交換財として社会の中で機能することは少なかった。奥田らの報告にあるように、交配が成功した謝礼として生まれた個体を種オスの所有者に贈与することはあっても、それ以外の一般的な交換や贈与の対象としてブタの生体個体を用いる慣習をヤミの人たちは有していない。このことは個々の家庭が必ずしも継続的にブタを飼育しないことの原因であるとも考えられる。すなわち、ヤミの人たちの社会では貨幣的な属性が必ずしもブタの生体個体には付与されておらず、ブタを所有し飼養するということが蓄財とはつながっていないと考えることができる。

こうした条件のもとで、ブタの飼育が行なわれていることから理解できるように、ヤミの人たちがブタ肉を食する機会は非常に限られている。彼らがブタ肉を消費するのは、①春先のトビウオ漁が開始されるときに儀礼行為に子ブタを用いる、②家族の中に病人もしくは産後の女性がいる場合にその滋養食として用いる、③自らが家屋や彫刻船の落成式を主催した際の饗宴に家畜を屠り食する、④他人が主催する落成式や祝い事等に伴う饗宴に参加し食肉を分配してもらい、といった場合であり、他者の主催する饗宴などに参加したり、何らかの祝い事や行事において村落内の成員や親族がブタを屠れば、

その肉の分配を期待することができた。このことは自らが落成式等を行ない、饗宴を催す予定がなければ、必ずしもブタを飼育する必要がないことを意味している。すなわち、彼らにとってのブタは儀礼活動の一つの構成要素としての食肉の分配に必要な動物であると言える。

5 考察

島嶼部という限られた環境の中でのヤミの人たちのブタ飼育は、イノシシからブタへの家畜化を直接説明するものではない。しかしながら、彼らが行なっている舎飼いと放し飼いの併用はイノシシもしくはブタと人間との関係を考えるうえで、多少なりとも示唆を与えるものであろう。彼らが舎飼いと放し飼いのどちらを採るかを定める一つの条件に、給餌の見通しが関わっていたことには留意しておく必要がある。

給餌の問題が家畜化の議論において重視されることはそれほど多くない。ヒツジやヤギをはじめとする家畜動物の大半は純粋な草食動物であると同時に、ブタに比べると採食した食糧の肉への変換率が相対的に低く、移動性に富んだ動物である。このことは動物の移動能力と採餌能力に委ねられた飼育方法である遊牧を可能にしてきた一つの条件と考えてよいだろう。動物に寄り添うかたちでの家畜化が行なわれたともいえるヒツジやヤギをはじめとした中大型草食動物の場合、給餌行動が必要とされない遊牧が家畜化の初期段階から現在にいたるまでも有効であると考えられている所以でもある。これに対し、ブタは雑食性であると同時に摂取した食糧の肉への変換効率ももっともよく、さらに自力での長距離の移動には必ずしも適していないという生態学的な属性を有している。したがって、移動できる範囲における餌の欠乏が生じやすくそれを補うための給餌を人間が行なわなければ、家畜としての存続が危うくなるのである。ブタのこうした生態学的な特質から、ブタが定住農耕民の飼育に適した家畜動物として定着していったという考え方が一般的である（加茂 1973: 756-757）。しかしながら、ヤミの人々のブタ飼育ではこれとは逆の状況が生じていた。すなわち、給餌ができないと判断された場合に放し飼いにするということが行なわれていた。これは、彼らのブタ飼育の目的とそれにとまなう飼育形態、ならびに彼らが飼育しているブタの生態が影響して生じた行動であると言える。

ヤミの人たちがブタを飼育する最大の理由は、なにかしらの特別な行事に際しての特別な食を準備することにある。とりわけ、家屋や彫刻船の落成式には饗宴に際して必ずブタの肉が必要となる。しかしながら、日常的な食生活の中にブタ肉が供されることはなく、また交換財としても機能することはないため、日頃からブタを肥育させることに関心がむけられるという状況は生じにくい。彼らのブタのこうした飼育の様式は、現在のように貨幣経済が生活に浸透する以前でも似たようなものであったことは奥田らの次

の記述からもうかがい知ることができるであろう。

然るに彼等の飼養にかかる家畜及び家禽は、平常は屠殺しないで、船・家又は銀兜の出来し時や祭祀の時、又は病人に出来た時、神に供物として回復をする時等に限り屠殺するのを見ても、彼等が家畜及び家禽の肉を如何に珍重しているかを知ることができよう。かかる場合には各家は是等の家畜及び家禽を沢山殺して御馳走することが、彼等の誇と考えられている。そして、肉は勿論、臓腑に至る迄細分して親類や近隣に、必ず平等に分配する慣習になっている（奥田他 1941: 368）

家屋や彫刻船の落成式は数年前から計画されているものであり、ブタやヤギの肉と同様に饗宴に供されるサトイモも2～3年かけて大量に栽培される。ブタも数年かけて大きくしていくのが通常の飼育でのありかたである。すなわち、肥育を早めることが必ずしもヤミの人たちのブタ飼育には有利に働くとはいえないのである。むしろ、彼らにとっては落成式やその他の特別な行事までにブタを維持するということがむしろ重要となってきたと解釈することができる。さらに、これは彼らのブタがミニブタという系統であることからわかるように、肥育がある程度まで進むと成長が鈍化する品種であり、肥育よりもむしろ維持させていくのに適したブタを彼らが利用していたことにもつながっていくのである。

一方で、彼らは放し飼いによって個体を受ける影響をある程度見極めながら、舎飼いと放し飼いとを使い分けている。放し飼いにする2つめの理由とされていた、他者の飼育状況に応じて自分も放し飼いにするか否かを決めているというのがそれにあたると考えてよい。すなわち、他者が放し飼いをしていることは、放し飼いの状態でもブタが生育できるとその所有者が判断していることになるため、それを見極めたうえで他の者も放し飼いを行なうという状況が生まれていたと言ってよいであろう。また、給餌の際に水をブタの生育個体にふりかけるのが、悪霊の靈力を弱めるためであるという説明が彼等自身によってなされている。しかしながら、これらのことはブタの生理学的な性質を考えた場合にも非常に合理的な飼育様式であることがわかる。亜熱帯気候の島嶼環境において高温が続く場合にはブタの体温を下げるための方法としても水浴びが有効であるということが理解できる。さらに、ブタは高温下では食欲の減退が生じることが知られていることから（田中 2001: 55）、気温の高い条件のもとでは採餌量が相対的に減退するため、放し飼いが行なわれていても近傍の畑を荒らす行動は抑えられる。それを補うためにも給餌を人間が行い、その際に体温を下げる効果をもつ水のふりかけが行なわれていたのである。すなわち、舎飼いと放し飼いの併用は、ブタの生理学的な特質を考えたときに非常に合理的な飼育様式であることが理解できるであろう。

6 まとめ

本稿で確認しておきたいのは、ブタの飼育方法としての舎飼いと放し飼いは併存されるものであり、しかも、それは大規模な食肉生産を目的とした放牧飼育にしばしば見られるような季節的な切り替えだけでなく、日々飼育の中でも採りうる飼育方法の組み合わせだということである。そうした飼育形態がとられた背景には、もちろんのことであるが、亜熱帯性の島嶼環境のもとで、肥育を主たる目的としないブタ飼育が、肥育が鈍化する品種を用いて行なわれていたというさまざまな条件が存在していた。イノシシからブタへの家畜化の動機づけが食肉の安定的な供給であり、肥育を目的とした家畜化という印象が強い一方で、肥育をおさえた品種を飼育するということが、ヤミの社会における家畜としてのブタの継続的な保持にうまく機能していたことには留意しておく必要がある。

ドメスティケーションの問題を考えるためにはいくつかの分野の協働が必要となることは言うまでもない。それぞれの分野のアプローチは大きく分けると2つのアプローチに区別されることになる。一つは、生物体の変化にドメスティケーションのありかたを見いだすアプローチである。これはいわゆる実証主義的アプローチであり、主として自然科学的な手法にもとづいた生物体の分析によって、ドメスティケーションの様相を解明しようという立場である。家畜化という問題にひきつけるならば、考古学は、動物考古学的手法にもとづいた遺存体の分析結果をもとに、地域ごとのドメスティケーションの中心地を見つけ、その時期を明らかにすることを試みる。農学や遺伝学は考古学資料と同時に現生資料の分析を通して、家畜種や考古遺存体の近縁関係とその地理的分布を明らかにすることによって、家畜化の地域的な展開について検討することを試みる。一方で、人間と動物との関係、すなわち、人間が動物に与える所作についての民族誌的アプローチは、その時代的な連続性は必ずしも保証されていないし、扱う社会の歴史的、文化的背景によって同一の事象が存在することは考えにくい。しかしながら、ドメスティケーションが人為的営みである以上、人間が生物に対して行なう所作そのものの把握とその文化的な背景を理解することは必要不可欠なことであるだろう。換言すれば、ドメスティケーションがきわめて人間的な現象であるという理解のもとでは、生物体の変化はドメスティケーションそのものをさすとは必ずしも言えない。それはドメスティケーションの結果が生物の形態や遺伝子上の変化として表れたにすぎないとも言える。

イノシシからブタへの家畜化の初期には生態学的資源としての動物の確保が最も重要な要件と考えられやすく、食肉利用という目的にむかった家畜化が進行し、それに伴う形態学の変化や遺伝的变化が生じていったという説明はきわめてわかりやすいものであろう。一方で、ヤミの人々の事例のように、特定の動物を維持するという営みが家畜化につながっていった可能性は否定できない。生態学的資源の確保が目的とされるブタ

の飼育の場合と異なり、個体を長期間維持していくことが目的とされた飼育であれば、必ずしも大量の個体が扱われるとはかぎらない。これは、もともと群居サイズがそれほど大きくないイノシシの家畜化を考えるうえで考慮してもよい問題と言える。

文 献

秋道智彌

1993 「ニューギニアにおけるブター狩猟と飼育の比較生態」佐々木高明編『農耕の技術と文化』pp. 309-331, 東京：集英社。

クラットン=ブロック

1989 『図説・動物文化史事典』増井久代・増井光子訳, 東京：原書房。

Hongo, H. and Meadow R. H.

1998 'Pig exploitation at Neolithic Çayönü Tepesi (Southeastern Anatolia) In Ancestors for the Pigs, edited by Sarah M. Nelson MASCA Research Papers in Science and Archaeology 15: 77-98. MASCA at the University of Pennsylvania Museum, Philadelphia.

加茂儀一

1973 『家畜文化史』東京：法政大学出版局。

賈思勰

1969 『齊民要術』西山武一・熊代幸雄訳。

Man E. H.

1975 *Aboriginal Inhabitants of the Andaman Islands*. Delhi: Sanskaran Prakashak.

松井健

1989 『セミ・ドメスティケーション—農耕と遊牧の起源再考』東京：海鳴社。

西谷大

2001 「豚便所：飼養形態からみた豚文化の特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第90集：79-149。

野林厚志

1996 「ヤミ族の社会生活についての予備的調査と今後の課題」『台湾原住民研究』1: 75-131。

小谷真吾

2005 「ブタはどのようにして現金になりうるのか？—パプアニューギニア高地周縁部における生業生態と貨幣経済」安室知編『国立歴史民俗博物館研究報告』第123集：85-102。

大林太良

1999 「オーストロネシア語族と豚の民族学」『オーストロネシアの民族生物学』pp. 339-357, 東京：平凡社。

奥田 彥・岡田 謙・野村陽一郎他

1941 「紅頭嶼ヤミ族の農業」『大南洋』pp. 325-372, 東京：太平洋協会。

夏本奇伯愛雅

1994 『雅美族的社会與風俗』台北：台原出版。

正田陽一

1987 「豚」正田陽一編『人間がつくった動物たち』 pp. 101-127, 東京：東京書籍。

台湾総督府警務局理蕃課

1936 『高砂族調査書』第1巻, 第2巻。

高橋春成

1995 『野生動物と野生化家畜』東京：大明堂。

田中智夫

2001 『ブタの動物学』東京：東京大学出版会。

常田邦彦

2001 「鳥獣保護制度とイノシシ管理」高橋春成編『イノシシと人間』 pp. 244-257, 東京：古今書院。

Wu C. Y. and *et al.*

2007 ‘The type I Lanyu pig has a maternal genetic lineage distinct from Asian and European pigs’ *Animal Genetics* 38: 499-505.

Zeder, M.

2006 ‘Central Questions in the Domestication of Plants and Animals’ *Evolutionary Anthropology* 15: 105-117.

ゾイナー・F. E.

1983 『家畜の歴史』国分直一・木村伸義訳, 東京：法政大学出版局。

